

日報問題からシベリアン・ コントロールを考える

廣瀬 誠 陸自73

自衛隊の日報が新たに発見されて、問題が再燃している。これに関し、自衛隊のシベリアン・コントロールが効いていないのではないかとの論調が一部に聞かれる。その存在が掌握できていなかったことは、確かに問題であるが、ここでは、日報問題全般の背景について考えてみたい。

厳しい状況の下で与えられた任務を達成しなければならぬ自衛隊にとつて、派遣された地域の状況を日々正確に把握するための日報なのであるから、開示されることにより、その中の「戦闘」の表現が政治的な視点から問題化することを懸念しなければならぬ状況は、困ったことである。

第一線の報告文書の一言言が、政治的な案件に結びつくことを常に考えなければならず、第一線がそのような視点で報告内容の表現を勘案しなければならぬとすれば、今後、中央が第一線の客観的な状況を把握することは、不可能になる。

本来、このような報告書は、その性格上、現場の状況、感じ方が伝わる生

の表現が重要なのである。また、日報のように現地の機微な情報は、現地部隊の安全に直結する情報を含んでいる可能性が高く、一般行政文書と同様に開示することは大きな問題である。これらについて、政治には配慮が求められる。

これらの問題は、自衛隊が軍隊ではないとされていることから生じている。今回の日報問題で、シベリアン・コントロール云々が指摘されているので、このことを借りて考えてみよう。

シベリアンはミリタリーに対する言葉である。シベリアン・コントロールとは、シベリアン（文民）によるミリタリー（軍人あるいは軍）のコントロールということである。我が国には、軍人と軍はいないことになっているので、理屈から言えば、シベリアン・コントロールは、シベリアンによるシベリアンの統制という、通常の行政的統制以上の意味はないことになっている。そして、現実にはその通りの文書管理制度になっているのである。

本筋から考えればおかしなことであるが、現在の制度的な枠組の中では、日報問題も、間違いなくシベリアン・コントロールではなく、一般的な行政的統制の問題になっていると思う。

本来、ミリタリーに属すべき事柄がシベリアンの枠組みになっている、そ

のことが問題なのである。自衛隊を、軍隊と認めなければ、これからも、このような問題がつきまとうであろう。

また、ことに応じてシベリアンとミリタリーという位置付けの使い分けが自衛隊に対してなされるのであろう。

しかしそれは、自衛隊と自衛官のアイデンティティの問題に直結し、徐々に、自衛隊における軍隊（自衛隊に期待されるのは軍隊としての機能であろう）として必要な職業意識を腐食させていくであろう。

日報問題に限らず、現下の情勢を踏まえれば、自衛隊の位置付けを明確にすることは喫緊の課題であると考ええる。

シベリアン・コントロールに真の意味を持たせるためにも、一日も早く自衛隊を軍隊と規定すべきである。